

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学校名	愛知県立名古屋特別支援学校	氏名	田原 浩美
-----	---------------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [0405]

地球の裏側にいる親友と

この研修で、同僚であり親友である青年海外協力隊の渡辺さんに会えたことが、私にとって大きなことだった。彼女が一人で踏ん張っている場所を、自分の目で見て肌で感じられたことで、私の心が強く揺さぶられた。



●写真2 [4874]

子どもの無邪気さは世界共通

メルセデス・ミルトス小学校で、「かもつれっしゃ」をして交流をした。言葉が通じなくても、楽しいことがよくわかる子ども達はとても無邪気に遊んでいて、日本の子どもと何も変わらなかった。



1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

現地研修における私の目的は二つあった。まず、本校の同僚である青年海外協力隊の渡辺さんに依頼した交流を実現させることである。本校で事前に授業を行い、児童一人一人がサン・ミゲル特殊教育センターの子ども達宛に書いた手紙を、センターの子ども達に手渡すことができた。今後は、センターの子ども達から受け取った手紙を本校の児童に渡し、さらにビデオレターを交換したり同じダンスを踊ったりする交流を行っていく。海外の人と知り合うことで、海外に関心をもてるようにしていきたい。もう一つの目的は、児童が五感で感じられる教材を持ち帰ることである。本校の児童は肢体不自由であるが、それぞれ得意な感覚がある。茶葉やスパイス、工芸品や伝統音楽のCDなど、五感に働きかける生の教材を入手してきた。児童が、経験したことのない刺激を感じ、さまざまな感想をもちながらも、いろいろな文化を受け入れられる力を育てていきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

パラグアイの人々と初めて出会ったとき、シャイで控え目な様子から“日本人に似ているな〜”という印象を感じた。そのような第一印象をもった私は、勝手にパラグアイと日本のあらゆる部分が似ていると想像していた。しかし、パラグアイの国家の成り立ちや現代の家族形態について知ると、パラグアイの独特な共生文化に気づき、より深く知りたいと思うようになった。

現代のパラグアイでは離婚が多く、再婚を繰り返して血縁関係のない親子になっても仲良く暮らしている家庭が多い。それでも、大切なものを問われると口をそろえて「家族」と答えるのだ。スペイン領植民地の時代や戦争を経て先住民が2%、混血の国民が95%になった経緯から考えると、パラグアイの独特な共生文化は生き残りへの道であったと感じる。また、その共生文化を築けたのは、過去に、隣人愛と平等主義を説くイエズス会の布教によって育まれた信仰深さではないかと思う。信仰深さは訪問先の諸所で感じる事ができた。このように、国民性に焦点を当てただけでもパラグアイの複雑な歴史がみられて大変興味深い。帰国してから、パラグアイについて益々知りたくなっている。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

昨年の夏、偶然気づいたが、私は何年も前からパラグアイ産のゴマを食べている。現地の訪問先に白沢商工株式会社があったのも運命を感じた。会社の玄関には取り扱っている製品が展示されており、その中に私が食べている商品があった。日本が輸入している白ゴマのほとんどはパラグアイ産だ。でも、パラグアイではゴマを食べない。元々、小規模農家では綿花の栽培が盛んだったが、価格低下により減少…白沢社長は、“貧困撲滅！”という一心でゴマ栽培を推進したという。なぜゴマなのか…小規模農家とゴマ栽培の特徴を分析し、安定して栽培できると判断したからである。また、農家には価格低下しても保障するし、価格高騰すればそれだけ支払うという条件を付けたのだという。心から貧困撲滅を願っているからこそできた偉業だと感じる。現在、白沢商工株式会社はパラグアイを代表する立派な大企業である。日本でも貧困問題は深刻だ。パラグアイと状況は違うが、皆が平等な世界を目指していることに違いはないと思った。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

研修最終日、最貧困カテウラ地区を訪れた。首都からほど近い街にそのスラム街はある。立派な大統領官邸を背景にして広がるスラムの光景は、あまりにも周囲とのギャップがあり過ぎて息を呑んだ。道には汚水が溢れ、家の窓は全て割れてなくなっているし、廃材で作られた家もある。大きな石が積み上げられたりゴミが散乱したりしている道を、学校の制服と思われる揃いのシャツを着た子ども達がリュックを背負って歩いている。

スラム街に住む人々の生活について聞くと、さらにやるせない気持ちになった。スラムを撤去する方針で建てられた公営住宅に移住することを勧められても、それを拒否して住み続ける人も多いそうだ。多くの人は、補助金が入るとテレビなどの家電や趣向品に遣ってしまうし、補助を受けることが当然のようにになっているという。これを聞いて、私は日本の生活保護制度の課題を思い出した。もちろん多くの人は真面目に生活しているが、一部そうでないことも事実である。その中には、知的障害などにより誤ったお金の使い方をしてしまい、生活保護制度によって守られるはずの最低限の衣食住が成り立っていない家庭がある。障害、知識不足、生活力不足…どこの貧困問題にも共通する課題であると感じた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

小規模ゴマ栽培農家支援の為の優良種子生産強化プロジェクト・フェーズIIのプロジェクトリーダー滝本さんの話は、興味深かった。日本国民の健康保護のため原産国の残留農薬問題の解決に取り組むことは、両国にとって良いことだと思った。また、滝本さんの話で登場した「インポートトレランス申請」に関する途上国の課題に取り組む支援が何かあると良いのではないかと思った。「インポートトレランス申請」とは、農薬の基

準値などについて自国のルールを提示することで、輸出相手国に改正を申請できるという制度である。しかし、パラグアイなどの途上国では自国のルール作りができておらず、その申請ができない。そのため、輸出相手国が提示する厳しい基準値に従うしかないという現状だ。努力している小農家の人々を守り、今後、途上国が他国と平等に発展していくためにも、この分野に関する専門家を国内で育成することが必要であると思った。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

③ 青年海外協力隊（柔道／バドミントン／レスリング／ウェイトリフティング）活動／スポーツ庁訓練センター【田原／児玉】

予定より早くスポーツ庁訓練センターに着いた私達は、センター内を少し見学することにした。センター全体は公園のようになっていて、ジョギングをしている人で溢れていた。陸上競技場では小学生対象の陸上教室が行われたり、地元の学生が競技練習に取り組んだりしている。筋力トレーニングルームやフットサルコートなど、新しい設備も多く整っている印象だ。とても賑わっているのが無料開放されているのかと思ったら、使用料を支払って利用する仕組みで、富裕層の人々が利用しているという。

青年海外協力隊4名の方との面会中、私は、柔道の指導者として活動している松本さんに話を伺った。今年のリオデジャネイロオリンピック出場を目指して取り組んできた活動だったが、予算の事情でその夢が叶わず落胆したという。しかし、今はジュニアオリンピック出場という目標があり、「今度こそは…」と熱く語ってくれた。青年海外協力隊の皆さんの活動にはたくさんの苦勞があり、本当にいつも頭が下がる思いだ。それでも慣れぬ地で踏ん張ってられるのは、彼らに大切な「夢」があるからだと感じた。（田原浩美）

⑥ イグアス日本人会【清水／田原】

今年、日本人がパラグアイへの移住を開始してから80周年を迎えた。イグアスへの入植は、55年前に14家族から始まったが、今では750人の日系人が住んでいるそうだ。比嘉会長や福井顧問からイグアス移住の歴史について伺うと、想像を超える壮絶さだった。当時、現地警察の手が回らないため自分達で現地の強盗と戦ったこと…永続農法として不耕起栽培を確立するまでの苦勞など…その団結力と根気強さに心打たれた。その苦しい時代に移住した人の7割が日本に引き返したそうだ。近年は、日本語学校や診療所、採石場などの施設運営や石畳舗装工事を手掛け、地域に大きく貢献している。また、大豆生産で経済的に豊かになった現在は、大豆畑を森に戻そうという環境保護活動を開始している。しかし、豊かになり治安が良くなった今でも、“自分の身は自分達で守らなければならない国”という意識をもっている。まだそのような緊張感があるのは、日系人と非日系人の格差が存在するためだった。それでもこの地に対し、日系・非日系に関係なく、市民が豊かで安全に過ごせるようにと団結し活動している日本人会の方々には、深く頭が下がる思いだった。（田原浩美）

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ【全員】

ホームステイ先はパン屋さんだと聞いていた私達二人は、お店でパンが作れるかな〜と、のん気に期待していたが…なんと、パパは大きなパン会社の経営者だった。そんなドッキリもあったが、パパはとても笑顔がチャーミングで、テレレをしながらいろんな話をしてくれた。ママもとても温厚で辛抱強く、言葉が通じない私達に筆談をしてまで一生懸命に話をしてくれた。ミルタ家には14歳と4歳の二人娘がおり、訪問中は無邪気で可愛い二人のおかげでリラックスできた。これまでの訪問先で、いろんな人が「大切なものは家族だ」と言っていたが、ホームステイをしてそれを肌で感じる事ができた。パパは、「大切なものは家族であり、家族がなければ熱心に働いて生きている意味がない」と言っていた。日中、ママに連れられて義母の家を訪ねたため、パパが言う“家族”は、同じ家に住んでいる親子だけでなく、祖父母や兄弟、その子ども達…と広く意味していることがよくわかった。信仰深く、愛情深いパパやママに出会い、無償の愛を感じる事ができたこと

が本当に良かったと思う。(田原浩美)

⑫ 青年海外協力隊（小学校教諭）活動／メルセデス・ミルトス小学校 [田原／市江]

粗い石畳の道を馬車が走るイタクルピ市内、坂の途中に現れた小さな門がメルセデス・ミルトス小学校の入り口だった。傾斜のある土地に建った校舎は段違いになっており、複雑な形をしている。先生方にパラグアイの子どもの良さを伺うと、自由な発想と前向きな姿勢があることだという。確かに、子ども達と交流をすると、皆熱心に取り組んでいた。その中に一人、両手指がまひしている児童がいた。彼女は誰の助けもなくペンを持って絵を描き、自信に溢れた表情で見せてくれた。彼女の夢はライターで、読み書きもクラスで一番良くできるという。近年、パラグアイではインクルーシブ教育に関して法律が定められ、障害を理由に入学を拒否した場合は罰則があるそうだ。しかし、教員は特別支援についての知識がほぼなく、教育機関に相談しても「わからない」という返答があるだけ。特に困り感がないこちらの小学校では、今後、特別支援学級を閉鎖する予定だという。障害のある児童が皆、ここで出会った少女のような強いパーソナリティをもっていれば良いが…誰もが充実した日々を過ごせる街になることを期待したい。(田原浩美)

⑬ シニア海外ボランティア（電気・電子機器）活動／カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校 [市江／田原]

カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校に到着すると、伝統品のプレゼントと壁面には日本語で「ようこそ」の文字…今までにないほどの歓迎ムードに驚いた。学校長の話によると、この学校は長年にわたり JICA を通じて日本の支援を受けているそう。そのため、親日的なのだ。校内を見学すると、どの施設にも日本国旗のシールが貼られた機材がたくさんある。そもそも、建物自体も九割は日本の支援で建てられたものだという。生徒に日本のイメージを聞くと、「日本の技術は素晴らしい」という答えばかり返ってくる。とても広大な敷地で、自動車整備科や設計製図科だけでなく、冷凍空調科（暑い国なので需要が多い）や、配管科など国の特徴が表れている専科があって興味深かった。このように設備が整った学校は少ないので、地方から八割の生徒が入学してくるという。そして、地方の生徒も下宿して通学できるよう、地域のさまざまな機関と連携している。生徒は真面目な印象だったが、それもそのはず、約九割の生徒が卒業前の実習先で就職を決めてくるほど優秀なのだ。このように、子ども達の意欲に応えられる学校が世界中に増えていくことを願う。(田原浩美)

⑭ JICA パラグアイ事務所関係者&JICA 東北受講者との懇親会@アルパ・ロガ [清水／田原]

建物に近づくと、スペイン・ギターとアルパ（パラグアイ・ハーブ）で奏でる陽気なポルカが聞こえてきた。奏者の男性は皆、伝統工芸品のアオポイ（細かく刺繍が施された綿）製のシャツを着ている。陽気な音楽とアルパの綺麗な音色は、集まった人達の気持ちをより高揚させるようだ。談笑しながら食事をしていると、ニャンドゥティ（手刺繍で華やか）の伝統衣装を着た女性とアオポイを着た男性が現れ、男女のドラマ仕立てのダンスが始まった。その後、女性が頭にボトルを縦に3本乗せてボトル・ダンスをすると拍手喝采の大盛り上がり。ボトルを10本も乗せて踊る人もいるそうだ。こんなにも素晴らしい伝統舞踊があるにもかかわらず、現在、パラグアイには伝統音楽や舞踊が見られる店などが無い。今回は、特別に設定してもらい見ることができたのだ。国が観光地化していないため、安心して店に立ち寄れるなど良いことは多くあった。ただ、伝統を傳承していくことや海外へのアピールについて考えると、披露する場があるといいのではないかと思った。(田原浩美)

● その他印象に残ったエピソード（誇り高い日本クオリティ）

バスの外を流れる街の風景を見ていると、日本の国旗に「TOKYO」と書かれた看板が多く目に付いた。訪問先では、クーラーの室外機にそのシールが貼ってあった。聞くと、中国の会社が日本製品の信用度を利用し、

「TOKYO」と銘打って販売しているそうだ。なんだか卑怯な気もするが、日本製品がそこまで信用されているのは誇り高い。ホームステイ先の家族は、トヨタ車に乗っていることや、パラグアイでトヨタ車がたくさん走っていることを嬉しそうに話してくれた。職業訓練校の生徒は、日常的に日本の機材を使用しているため、皆口をそろえて「日本の技術は素晴らしい」と言っていた。また、小学生に日本のイメージを聞いてもなかなか意見は出なかったが、アニメの名前を言うと皆知っていた。子ども達には、日本のものという特別な意識はないものの、自然と日本の文化や技術と生活しているようだ。日本人も、日本製品を一番信用し、誇りをもっている人が多いと思う。自国の誇らしい部分を、海外の人々にも同じように高評価されているのは、本当に素晴らしいと思った。(田原浩美)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・現地研修は体力勝負。腸の調子を崩すと体調に大きく影響するので、食べ過ぎ注意。私は整腸剤(ビオフェルミン)のおかげ(?)で元気に過ごせた。また、便秘もかなり体調に響く。今回は、思い返すと十分な水分が摂れておらず、便秘の人もいた。水分摂取は意識的にした方が良い。
- ・長時間の機内生活の中で、急にクーラーが強くなって冷え込む時間帯があったので、防寒着は必須。
- ・時間や計画に忠実なのは日本人の大きな特徴。そうではない国が多いので、計画通りにいかなくても仕方がないと思う心構えは大事。でも、自分達は時間や約束を守るべき。
- ・研修日程はかなりタイトで、ゆっくり考えたり買い物をしたりする時間はない。購入したい物、現地の人に質問したいことなどは、個人でしっかり事前調査して行った方が良い。そして、自分が得た情報は、仲間と惜しみなく共有しましょう。
- ・からだを動かす遊び(だるまさんが転んだ、かもつれっしやシュッシュッシュなど)は、子ども達の反応がとても良い。「だるまさんが転んだ」は、日本語でやると高校生も大盛り上がりで交流できた。
- ・電子辞書や翻訳アプリ、指さし辞書などは、ホームステイ先で本当に役に立つ。コミュニケーションが取れないのが一番辛いので、コミュニケーション手段(日本の遊び道具やお土産も会話のきっかけ、日本や自分に関する紹介を冊子にして現地の言葉で解説を書いておくと良い)は、いろいろと持って行った方が良い。
- ・研修の目的は、その国のことを知って日本の子ども達に伝えることである。現地で、現地の人の文化や国民性に対して批判的な意見が湧いたとしても、目的に沿っていないので議論無用。一つの意見として仲間内で話すのは良いが、批判したところでこの研修では解決が難しいし、現地の人々の気分を害すだけなので、黙って日本に持ち帰りましょう。

6. その他全般を通じての感想・意見など

- ・事前準備のところで、現地の人への質問事項など、なかなか整理できなかつたり、混乱してひどく遠回りな作業をしたりしてしまった。今回のように、話合いの見通しをもたず、漠然と興味があることなどを書き出してから取り組むのは建設的ではなかったように思う。自覚が足りず、資料を頭に入れていなかった自分も悪いが…日程を把握し、どのような場面で、誰に対して質問をするのかなど、もう少し具体的に現地のイメージをふくらましてから質問内容や情報収集手段を考えると良い。
- ・ワークシートや交流準備など、現地で取り組むことが多く、睡眠時間が短くなった。現地の教員との意見交換など、有意義にしたいときに頭が働かず悔しい思いもした。長い研修期間で睡眠不足が続くことは体力的にも精神的にも非常に厳しかった。
- ・ワークシートは、学びを深めるためや記録のために大変重要なものだが、研修報告書(項目2. 3. 4)とリンクした内容に絞っても良いかもしれない。
- ・日記はとても思い出として素敵なものだが、現地での負担は非常に大きかった。制限がないため、長文になり、睡眠時間が削られた。また、前者の記入量に合わせて同じ量を書こうとするため、プレッシャーになる。

枠のある形式的なノートにした方が良い。

- 買い物の時間が短く、予定していた以外の物（現地で発見した教材）の収集が難しかった。言葉が通じないので通訳の方頼みになりがちで買い物には時間がかかる。欲張りかもしれないが、入手できなかった物で、もっと日本の子ども達に見せたいものがあった。

以上